

二〇〇二年六月二日　夕　拝

かわいた所を出現させた方が（二）

創世記一章九節～一三節

創世記一章九節、一〇節には、神さまが、天地創造の第三日に、「天の下の水」を一所にお集めになって、「かわいた所」が現われるようにしてください、たこと、

かわいた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられたことが記されています。

これまで「かわいた所」と訳されているヤバーシャーということばが聖書の中で用いられている事例に当たることによって、「かわいた所」が現われるようにしてください、た御業が、特に神さまの贖いの御業との関係で意味をもっていることについてお話ししてきました。

それは、二つのことと関わっています。

一つは、出エジプトの際に、神である主が紅海の水を分けて、イスラエルの民が乾いた地を通るようにして渡ることができるようにされたこと、そして、その同じ水によってエジプトの軍隊をさばかれたことです。

もう一つは、イスラエルの民が約束の地であるカナンに入る際に、神である主がヨルダン川の水をせき止めて、イスラエルの民が乾いた地を通るようにして渡ることができるようにしてください、たことです。

実際の歴史の流れの中では、この出エジプトの出来事とカナン侵入の出来事との間には四〇年近い時間的な隔たりがあります。しかし、その二つの出来事は、神である主の一つの贖いの御業の二つの段階です。神である主はイスラエルの民をエジプトの奴隷の状態から解放してください、たしましたが、その後、イスラエルの民を放置されたものではありません。イスラエルの民の父祖であるアブラハムに与えられた契約の約束を記す創世記一七章七節、八節には、

わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、そしてあなたの後のあなたの子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしがあなたの神、あなたの後の子孫の神となるためである。わたしは、あなたが滞在している地、すなわちカナンの全土を、あなたとあなたの後のあ

なたの子孫に永遠の所有として与える。わたしは、彼らの神となる。

と記されています。神である主はこのアブラハムへの契約の基づいて、イスラエルの民を約束の地であるカナンの地へと導き入れてくださいました。しかし、実際には、イスラエルの民の不信仰のために、カナンの地に入るようになるまでに約四〇年にわたる荒野での放浪の時代がありました。

民数記一三章、一四章には、主がいよいよイスラエルの民を約束の地へと導き入れてくださるために、カデシユ・バルネアから、イスラエルの各部族の代表者たちを偵察のために遣わされたことが記されています。一三章三二節、三三節に、

彼らは探つて来た地について、イスラエル人に悪く言いふらして言った。

「私たちが行き巡つて探つた地は、その住民を食い尽くす地だ。私たちがそこで見た民はみな、背の高い者たちだ。そこで、私たちはネフィリム人、ネフィリム人のアナク人を見た。私たちには自分がいなごのように見えたし、彼らにもそう見えたことだろう。」

と記されていますように、その時、カナンの地を探ってきた者たちのうちヨシユアとカレブを除く者たちは、イスラエルの民がその地に入ることができないと報告しました。

イスラエルの民は、その報告を受け入れて、カナンの地に入ることを拒みました。主のアブラハムに対する契約と、その契約に基づいて遂行された出エジプトの贖いの御業をおしてあかしされている主の御力を信じなかつただけでなく、主の真実な愛と恵みを信じなかつたのです。そのために主のさばきを受けて、四〇年の間荒野をさまようことになりました。その結果、出エジプトの出来事とイスラエルの民がカナンの地に導き入れられたこととの間に、四〇年にわたる時間的な隔たりが生じてしまいました。

申命記二章一四節には、

カデシユ・バルネアを出てからゼレデ川を渡るまでの期間は三十八年であつた。それまでに、その世代の戦士たちはみな、宿営のうちから絶えてしまつた。主が彼らについて誓われたとおりであつた。

と記されています。それで、そのカデシユ・バルネアでの出来事は、イスラエルの民がエジプトの地を出てから、二年ほど経つた時に起こつたことが分かります。ですから、イスラエルの民がカナンの地に導き入れられることは、本来は、出エジプトの出来事から数年のうちに起こつていたはずのことでした。

このことから、カナン侵入の際に、主がヨルダン川の水をせき止めて、イスラエルの民が乾いた地を通るようにして渡ることができるようになってくださったことの意味が分かります。それは、その時から約四〇年前の出エジプトの際に、主が紅海の水を分けて、イスラエルの民が乾いた地を通るようにして渡ることができるようになってくださった御業を、いわば、再確認させていたださることでした。

*

言うまでもないことですが、その当時、エジプトから出るための道としては、通常の交通路がありました。しかし、主はわざわざイスラエルの民が紅海を通じてエジプトを脱出するように導かれました。

出エジプト記一三章一七節、一八節では、

さて、パロがこの民を行かせたとき、神は、彼らを近道であるペリシテ人の国の道には導かれなかった。神はこう言われた。「民が戦いを見て、心が変わり、エジプトに引き返すといけない。」それで神はこの民を葦の海に沿う荒野の道に回らせた。イスラエル人は編隊を組み、エジプトの国から離れた。

と言われています。

長いことエジプトの地で奴隷であったイスラエルの民は、反乱を防ぐエジプトの政策によって戦うために必要な武器を持つことを許されなかったことでしょう。また、戦いの訓練もできていなかったはず。そのために、ペリシテ人を初めとする諸国の民との戦いを恐れて引き返す恐れがありました。それで、神は、彼らを近道であるペリシテ人の国の道には導かれなかった。

と言われています。

そして一三章二一節〜一四章四節には、

主は、昼は、途上の彼らを導くため、雲の柱の中に、夜は、彼らを照らすため、火の柱の中にいて、彼らの前を進まれた。彼らが昼も夜も進んで行くためであった。昼はこの雲の柱、夜はこの火の柱が民の前から離れなかった。主はモーセに告げて仰せられた。「イスラエル人に、引き返すように言え。そしてミグドルと海の間にあるピ・ハヒロテに面したバアル・ツエフォンの手前で宿営せよ。あなたがたは、それに向かって海辺に宿営しなければならぬ。パロはイスラエル人について、『彼らはあの地で迷っている。荒野は彼らを閉じ込めてしまった。』と言うであろう。わたしはパ

口の心をかたくなにし、彼が彼らのあとを追えば、パ口とその全軍勢を通してわたしは栄光を現わし、エジプトはわたしが主であることを知るようになる。」そこでイスラエル人はそのとおりにした。

と記されています。

ここに記されているとおり、このことには主の贖いの御業としての理由がありました。一四章四節では、

パ口とその全軍勢を通してわたしは栄光を現わし、エジプトはわたしが主であることを知るようになる。

と言われています。

もちろん、それはイスラエルの民へのあかしでもありました。出エジプト記一四章二七節～三一節には、

モーセが手を海の上に差し伸べたとき、夜明け前に、海がもとの状態に戻った。エジプト人は水が迫って来るので逃げたが、主はエジプト人を海の真中に投げ込まれた。水はもとに戻り、あとを追って海にはいったパ口の全軍勢の戦車と騎兵をおおった。残された者はひとりもいなかった。イスラエル人は海の真中のかわいた地を歩き、水は彼らのために、右と左で壁となったのである。こうして、主はその日イスラエルをエジプトの手から救われた。イスラエルは海辺に死んでいるエジプト人を見た。イスラエルは主がエジプトに行なわれたこの大いなる御力を見たので、民は主を恐れ、主とそのしもべモーセを信じた。

と記されています。

けれども、この、紅海における神である主の救いとさばきの御業は、ただ単に、ご自身の民であるイスラエルに対するあかしという以上に、エジプトを初めとする諸国の民に対するあかしとしての意味をもっていました。

一五章一四節～一六節に記されていますように、モーセとイスラエルの民は、その時、

国々の民は聞いて震え、

もだえがペリシテの住民を捕えた。

そのとき、エドムの首長らは、おじ惑い、

モアブの有力者らは、震え上がり、

カナンの住民は、みな震えおののく。

恐れとおののきが彼らを襲い、

あなたの偉大な御腕により、

彼らが石のように黙りますように。

主よ。あなたの民が通り過ぎるまで。

あなたが買い取られたこの民が通り過ぎるまで。

と歌いました。

もちろん、これは、主の民イスラエルを奴隷として虐げていたエジプトに対するさばきとしての意味をもっていました。けれども、エジプトに対するさばきということだけであれば、イスラエルがエジプトの地にある間にエジプトに下された、過越の夜のさばきを頂点とする十の災いを通してのさばきで十分であったのではないだろうか。

紅海の水を分けてイスラエルの民を通らせてくださり、そこでエジプトの軍隊を滅ぼされたことは、エジプトだけでなく、それ以外の国々にも、主がどなたであるかをあかしすることになりました。その地域の弱小国家は、どこもエジプトという強大な国家の動きに注意を払っていたはずで、それで、エジプトで起こったこと、特に、彼らが最も恐れていたエジプトの軍隊が全滅するような損害を受けたというニュースは、いち早く周辺の国々に伝わったことでしょう。

出エジプト記一四章一三節、一四節には、エジプトの王パロの軍隊が負いかけてくるのを見て恐れたイスラエルの民に対してモーセが語った、

恐れてはいけない。しっかりと立つて、きょう、あなたがたのために行なわれる主の救いを見なさい。あなたがたは、きょう見るエジプト人をもはや永久に見ることはできない。主があなたがたのために戦われる。あなたがたは黙っていないければならない。

ということばが記されています。

このことばからも分かりますが、主がイスラエルの民とともにいてくださってイスラエルの民のために戦ってくださったのです。それが紅海においてパロの軍隊をおさばきになるといふ形であかしされました。この後は、エジプトの支配者は二度とイスラエルの民に手を出すことはありませんでした。エジプトの支配者は諜報の能力に優れていましたから、当然、荒野を旅するイスラエルの民の存在を知っていたはずで、しかし、荒野を旅するイスラエルの民には手を出しませんでした。それは、この紅海での出来事が、エジプトにとって余りにも特異で恐るべき出来事であったからでしょう。

また、それは、その地域の国々の記憶にも留められていたようです。たとえば、それから四〇年後のカナンの地でのことを記すヨシユア記二章九節〜一節には、

主がこの地をあなたがたに与えておられること、私たちはあなたがたのことで恐怖に襲われており、この地の住民もみな、あなたがたのことで震えて来られていることを、私は知っています。あなたがたがエジプトから出て来られたとき、主があなたがたの前で、葦の海の水をからされたこと、また、あなたがたがヨルダン川の向こう側にいたエモリ人のふたりの王シホンとオグにされたこと、彼らを聖絶したことを、私たちは聞いていますからです。私たちは、それを聞いたとき、あなたがたのために、心がしなえて、もうだれにも、勇気がなくなってしまうました。あなたがたの神、主は、上は天、下は地において神であられるからです。という遊女ラハブのことばが記されています。

*

このように、主が紅海の水を分けて乾いた地を出現させ、イスラエルの民にそこを通らせてくださり、同じ水でエジプトの軍隊を全滅させられたことは、その当時の人々に深い印象を残しました。それは、言うまでもなく、そこで起こった出来事が特異で恐るべき出来事であったからです。それとともに、そこには、もう一つの理由があると思われまます。

古代オリエントの文化の中では、「海」は神（神々）に敵対する暗やみの勢力として、それ自体神的なものとして理解されていました。たとえば、ウガリット神話に出てくるヤム、あるいは、ヤム・ナハルは暗やみの勢力である怪物ですが、その名は「海」あるいは「海・川」を表わしています。それで、その当時の人々にとっては、主が紅海の水を分けて乾いた地を出現させ、イスラエルの民にそこを通らせてくださり、同じ水でエジプトの軍隊を全滅させられたことは、主が暗やみの勢力をも従わせておられることと写ったわけです。紅海での主の御業は今日の私たちにとっても大変な出来事であったと感じられますが、その当時の人々には、今日私たちが考える以上の衝撃を与えたと思われまます。詩篇七四篇一三節、一四節では、そのことを踏まえて、

あなたは、御力をもって海を分け、

海の巨獣の頭を砕かれました。

あなたは、レビヤタンの頭を打ち砕き、

荒野の民のえじきとされました。
と歌われています。

この詩篇に歌われていますように、実際に、主は紅海における救いとさばきの御業をとおして、主が暗やみの勢力をも従わせておられるというあかしを立てられました。

とはいえ、これには注意して受け止めなければならないことがあります。確かに、聖書は、主が暗やみの勢力を、ご自身の無限の知恵と御力によって治めておられることを示しています。けれども、海そのものが暗やみの勢力である、というような考え方を退けています。海そのものは、創世記一章九節―一三節に記されているみことばが示しているように、神さまの天地創造の御業によって造られたものです。その意味で、それは神さまがお造りになったよいもので、後にそこに生き物たちが群がるようになる場所です。

すでにお話ししましたとおり、神である主が、紅海の水を分けて乾いた地を出現させ、イスラエルの民にそこを通らせてくださり、同じ水で、エジプトの軍隊を全滅させられたことは、主が、天地創造の三日目に「天の下の水」を一所にお集めになって、「かわいた所」が現われるようにしてくださった神であることをあかししています。これが、聖書が示すこの出来事の意味です。

海そのものが神（神々）に敵対する暗やみの勢力であるという考え方は、神（神々）に敵対する勢力が初めからあって、神（神々）と戦っているとするものです。それは、悪が実体である（形而上的なものである）とするものです。聖書には、そのような教えはありません。

創世記一章三一節に、

そのようにして神はお造りになつたすべてのものをご覧になつた。見よ。

それは非常によかつた。

と書かれていますように、聖書が示すところは、すべてのものは善いものとして造られた、ということです。この世界に存在するすべてのものは造り主である神さまの御手によって造られたものですが、悪は神さまによって造られたものではありません。つまり、悪は実体ではないのです。

それなのに、この世界に悪いものが存在しているのは、自由な意志をもつものとして造られた人格的な存在者が、造り主である神さまの御前に高ぶって、自らが神の位置に立とうとする罪を犯したことによって、墮落したからであると教えられています。それが、サタンを初めとする悪霊たちの墮落であり、人

類の墮落です。もともと善いもの、優れたものとして造られていた人格的な存在が、造り主である神さまに対して罪を犯したために、その自由な意志を含めた人格的な特性が腐敗してしまいました。このことが、この世界に悪が存在するようになった理由です。

そして、被造物の世界も、神のかたちに造られてこの世界を治める使命を委ねられた人間との一体において虚無に服してしまいました。そのことは、創世記第三章一七節に記されていますように、神さまが罪を犯して墮落してしまったアダムに、

「あなたが、妻の声に聞き従い、

食べてはならないと

わたしが命じておいた木から食べたので、

土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。

とさばきのことばを宣言されたことに表わされています。

また、この神のかたちに造られている人間と被造物の世界の一体性を踏まえ、ローマ人への手紙八章一九節、二〇節では、

被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。

それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。

と書かれています。ここでは、神である主の贖いの御業によって人間が本来の神のかたちの栄光に回復されれば、被造物も人間との一体において回復されるという「望みがある」ということが示されています。

いずれにしても、海が荒れ狂う恐ろしいものとなったのは、また、水が洪水などによって人を脅かすものになったのは、さらには、海や大水が神さまのさばき的手段として用いられるようになったのは、ノアの時代の洪水によるさばきに典型的に示されているように、神のかたちに造られて、この世界を治める使命を委ねられている人間が、造り主である神さまに対して罪を犯して墮落したことによっています。

聖書には、海や、大水を恐るべき性格をもったものとして描いている個所がいくつもあります。たとえば、詩篇六九篇一節、二節では、

神よ。私を救ってください。

水が、私ののどにまで、はいつて来ましたから。

私は深い泥沼に沈み、足がかりもありません。

私は大水の底に陥り

奔流が私を押し流しています。

と言われています。

このような描写には、このような聖書の教えの背景があることをわきまえたうえで理解する必要があります。

先ほどお話ししましたように、海が荒れ狂う恐ろしいものとなり、水が洪水などによって人を脅かすものになったのは、神のかたちに造られてこの世界を治める使命を委ねられている人間が、造り主である神さまに対して罪を犯して墮落したことによっています。人はそのことをとおして、自らの罪と墮落の現実を認めて、造り主である神さまの御前に身を低くすべきです。それなのに、造り主である神さまに対して罪を犯して御前に墮落してしまっている人間は、海そのものが悪であるとすることによって、自分たちの罪による墮落の責任を認めて、造り主である神さまの御前にへりくだることをしないようにしているわけです。

これらのことと関連して、黙示録二一章一節を見てみましょう。そこには、また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。

と記されています。ここでは、終わりの日に再臨される栄光のキリストによって造り出される新しい天と地においては、人間の罪による墮落の結果生じた荒れ狂う「海」の存在、そして、その当時の文化において暗やみの力の象徴として用いられていた「海」は、もはや存在しなくなることが示されています。

*

創世記一章一〇節では、

神は、かわいた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。

と言われています。

ここには、神さまが

かわいた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた

ことが記されています。

すでにお話ししたとおり、聖書において名をつけることは、その名がつけられたものの位置や特性を示すとともに、名を与えた者が名をつけられたもの上に権威をもっていることを示しています。

ここでは、神さまがご自身の主権のもとに「地」と「海」にそれぞれの位置

をお与えになって、「地」は「地」として、「海」は「海」として保ってくださいることを意味しています。それで、「海」がその位置を越えて「地」を覆うようなことはありません。詩篇一〇四篇九節において、

あなたは境を定め、

水がそれを越えないようにされました。

水が再び地をおおうことのないようにされました。

と告白されているとおりです。

同時に、これによって、神さまは、「地」には「地」としての意味（役割）を、「海」には「海」としての意味（役割）を与えてくださいました。これによって、「地」には植物たちが芽生え育つようになり、生き物たちが生息し、やがて、神のかたちに造られている人間が生息することができるようになります。そして、「海」には「海」にすむ生き物たちが生息することができるようになります。

天地創造の第三日に、「天の下の水」を一所にお集めになって、「かわいた所」が現われるようにしてください、

かわいた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた神さまは、今日に至るまで、真実な御手によって「地」と「海」を、それぞれに固有な位置と意味をもつものとして保ってくださいっておられます。

人々はこの「地」を「母なる大地」と呼んでいます。「地」には、無尽蔵とも思えるほどの豊かさがあるのです。しかし、その「地」の豊かさは、造り主である神さまの無限のいつくしみの御手が備えてくださっている豊かさです。